

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「声」と「口調」からみた言語行動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相澤, 正夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003310

「声」と「口調」からみた言語行動

言語体系研究部 相澤 正夫

(E-mail: aiz@kokken.go.jp)

要旨：

話しことばコミュニケーションの様相を第三者の立場から描写するとき、「『私は怒ってなんかいません』とふるえる声で言った」「『そうですか』とがっかりした口調で言った」のように、引用符の中に話された内容を示し、引用符の外にそのときの話し方の特徴を補うという方法がしばしばとられる。音声による言語行動を忠実に捉えようとするならば、引用符の中の言語形式として再現しきれない要素をひろいあげ、必要に応じて補足するというかたちで全体を再構成しなければならない。

本発表では、音声による言語行動を構成するさまざまな要素のうち、話し方の特徴に深く関わる「声の調子 (tone of voice)」と呼ばれる部分に注目し、日常的な日本語による描写ではそれがどのように再現されているのかを、「声」と「口調」という切り口から探してみる。資料収集の対象としては、多様な対話場面を数多く含むということで推理小説を選んだ。

具体的には、次の三点に言及する。(但し、調査研究としては、資料収集と分析の観点を探索する段階にあり、あくまでも中間報告であることをお断りしておく。)

- ① 日本語では、話し方の特徴を「声」「口調」の様態として描写する傾向が強い。このことは、英語で書かれた推理小説の原文とその和訳との対照からも推察される。
- ② 「声」として描写される事象と「口調」として描写される事象とには、それぞれに固有の部分と重複する部分とがあり、重複する部分もかなり大きい。
- ③ 「声」「口調」を描写する語彙・言語表現を大量に集め、体系的に整理・分析することによって、音声による言語行動の総合的な解明に向けて、言語学(特に語彙論)の側から有用かつ不可欠な情報を提供することができる(のではなかろうか)。

キーワード： 声 口調 音声言語 言語行動 語彙論

1. ある実験のエピソード

次は、アメリカで行われたというある実験の話である[文献1]。

あるアメリカ人の家庭で夫妻が友人や親類、仕事の関係者等を招いてパーティーをした。ほぼ予定していた人達が集まった頃主催者の夫人が、食事の前のデザートとして、自家製のアップルパイを来客一人一人の席の前に置いた。そして彼女ははっきりとよく通る声で次のように言った。「それでは、皆様パイをどうぞお召し上がりください。各々のパイには Paris Green という非常に高度な毒性の物が入っています。どうかもし、お気に召しましたら、もう一つ差し上げますので、いつでもおっしゃってください。」

これは、周囲の状況や話し手のスタイルが、メッセージの伝達にいかなる影響をもたらすか、それを調べるために仕組まれた実験である。結果は、誰も夫人の作ったパイが毒性であるとは

思わなかったということである。中身がいくら恐ろしいものであっても、夫人の明るい声の調子、穏やかであたたかみのある抑揚、そしてつつましやかで優雅な仕草などが来客に絶対的な影響を与えたためであるとの分析が示されている。

極端な事例かもしれないが、実際のコミュニケーション場面において、言語それ自体によるメッセージの伝達力が実はどれほどのものであり、また、その一方で言語以外の様々な要素から発せられるメッセージがいかに強力に作用しうるものであるのかを、まざまざと伝えてくれるエピソードには違いない。

2. 話しことばの特徴：「音声化」

話しことばの特徴は、「実際に声に出して話すこと」にある。現実のコミュニケーション場面では、「声に出す」という音声化の過程を通して、われわれの通常の予想をはるかに超えて、意味のある情報がさまざまに伝達されている〔文献2〕。

音声という伝達媒体が伝える情報には、前節で見たように、「言語情報」（文字化したときに、書き起こした文面からただちに得られる情報）として括り出されたもの以外にも、「パラ言語情報」（発話時の話者の意図、心的態度、感情などに関する情報）や「非言語情報」（話者の年齢、性別、生理的な状態などに関する情報）が含まれている。

本発表では、主としてこのパラ言語情報と非言語情報に相当する情報が、日常語レベルではどのように描写されているのか、そしてそれが総体としてどのような構造体をなしているのかを明らかにするために、一つの有効な切り口として「声」と「口調」の用法に注目する。

林大氏は、かつて「（略）私は、場面に適応する過程としての言語行動について、あらゆる名目（名づけられた言語行動）を集積し整理して、言語生活の見渡しをすることが必要かと思う。それは一種の語彙分類である。またその上で言語能力というものを見直してみたいものと思う」と書かれた〔文献3〕。本発表のアプローチは、この林氏の着想に触発されたものであり、部分的ながら実現してみようとするものである。「語彙論的言語行動論」とでも呼ぶべき領域が、新たに拓けるのではないかと期待されるからである。

3. 「声」と「口調」の用例採集

日常語レベルで「声」と「口調」を描写する言語表現を大量に収集するために、次のような方針で用例採集を行い、データベース化した。

【目標】「声、口調」だけでなく、「語調、（声の）調子、話しぶり」等を修飾する形容語句を総覧し、言語行動の観点からできるだけ見通しのよい分類を行なう。

【資料】会話部分と言語行動の描写を多く含むという点で、推理小説が適当と判断した。描写される場面や登場人物がきわめて多彩であることも都合がよい。

- ・日本推理作家協会編『ミステリー傑作選』1～20（講談社文庫）、計20冊。年度ごとの短編のアンソロジーで、概算で約12,000ページ分。
- ・アガサ・クリスティーのミステリーの翻訳本（ハヤカワ文庫）とその原本、計20冊。訳者は一冊ごとに全て異なり、翻訳本の概算で約6,000ページ分。

【方法】発音・発声動詞、発言動詞、発話動詞などと共起する諸成分のうち、これらの行為そのものの一側面を描写していると思われる言語表現を、その動詞類とともに比較的ゆるい基準で採集する。非言語行動の描写も含め、前後の文脈が十分たどれるように配慮する。

【結果】実際には、「声、口調、調子、語調、響き、口ぶり、話しぶり、言い方、話し方、喋り方、口のきき方、言い回し、語り口、口吻、語気、言葉遣い、言葉つき、アクセント、トーン、～調（詰問調など）、～口（早口、軽口など）」を修飾する形容語句が採集された。中でも、「声」と「口調」の用例が圧倒的に多いことが注目される〔文献4〕。

4. 「声」と「口調」の用法：アガサ・クリスティーの翻訳から

まずアガサ・クリスティーの翻訳本で「声」と「口調」の用例を採集し、次に原文ではその該当箇所がどうなっているかを調べてみた。「voice」の訳語として「声」と「口調」が用いられているケースのほかに、動作の様態を表わす副詞の部分を「声」「口調」として訳出しているケースが目立つ。これは、日本語として自然な翻訳を心掛けると、自ずと「声」「口調」が前面に出てくるということではないだろうか。次の(1)～(11)に、用例を示す。

[するどい声]

- (1) 鋭い、いらだった声が腹立たしそうに爆発した。「そんなこと、しちゃいけませんよ、ジョージ。(略)」／またなにか必死の抗議をしている、低い声が聞こえた。(『カーテン』中村能三訳)

The sharp, irritating voice burst out indignantly: 'You'll do no such thing, George. (abbr.)' / Again there was an agonized low protesting mumble.

- (2) ウォーグレイヴ判事が鋭い声でいった。「こんなに大勢乗るのだよ」／「この倍の人間が乗っても平気ですよ」／フィリップ・ロンバードが陽気な声でのんきそうにいった。(『そして誰もいなくなった』清水俊二訳)

Mr. Justice Wargrave said sharply: / 'There are a good many of us.' / 'She'd take double the number, sir.' / Philip Lombard said in his pleasant, easy voice:

[するどい口調]

- (3) 「なんですって？」／あんまり鋭い口調だったので彼はびっくりした。(『検察側の証人』小倉多加志訳)

'I beg your pardon?' / The sharpness of her voice made him start.

- (4) エマ・クラッケンソーブは鋭い口調で言った。／「外国人ですって。フランス人ですか？」(『パディントン発4時50分』大門一男訳)

Emma Crackenthorpe said sharply: / 'A foreigner. Was she French?'

[はっきりした声]

- (5) エミリーははっきりした声でいった。「支度ができましたね。持って行きましょう」(『そして誰もいなくなった』清水俊二訳)

She said in a brisk voice: / 'Everything's ready, isn't it? We'll take the breakfast in.'

- (6) かたわらの老婦人がはっきりした声でいった。「私も簡単に信じてしまったことを後悔しているのですよ。よく考えてみれば、信じてはならない手紙でした。でも、あのときは、少しも疑わなかったのです」(『そして誰もいなくなった』清水俊二訳)

The elderly woman beside her said briskly: / 'I'm very annoyed with myself for

being so easily taken in. Really that letter is absurd when one comes to examine it. But I had no doubts at the time - none at all.'

【はっきりした口調】

(7) ロディーははっきりした口調で答えた。／「まあ、深い愛着を感じていたとはいえませんが、決して激しい恋愛感情は持ちませんでした」（『杉の柩』恩地三保子訳）

Roddy answered in his precise voice: / 'I should say she was deeply attached to me, but certainly not passionately in love with me.'

(8) ヴェラははっきりした口調でいった。「いいえ、外にいますわ」（『そして誰もいなくなった』清水俊二訳）

Vera said decisively: 'Not at all.'

【おだやかな声】

(9) クリスチン・レッドファンはおだやかな声で尋ねかけた。／「あの女が来るっていうこと、知っていたの？」（『白昼の悪魔』鳴海四郎訳）

Christine Redfern asked in her quiet voice: / 'Did you know that woman was going to be here?'

(10) 判事は顔をなでながら、おだやかな声でいった。「申し聞きをしておくことはないのですか」（『そして誰もいなくなった』清水俊二訳）

The judge stroked his face. He said mildly: / 'You reserve your defence?'

【おだやかな口調】

(11) マーシャルはちょっと考えていたが、おだやかな口調で言った。／「いや、そう考えるのはばかげてる。初めのうちこそぼくに嫌疑のかかったのはリンダも知っていましたよ。でも今となってはそれはもうすんだことで、リンダもわかっていたはずだが——警察はぼくのアリバイを認めてほこ先をよそへ向けたんです」（『白昼の悪魔』鳴海四郎訳）

Marshall considered for a moment or two, then he said quietly: / 'No, I think that idea is absurd. Linda may have realized that I was regarded with suspicion at first. But she knew definitely by now that that was over and done with - that the police had accepted my alibi and turned their attention elsewhere.'

5. 「声」と「口調」の用法：ミステリー傑作選から

「声」または「口調」として描写される事象は、次の三つのタイプに大別される。

- ・「声」のみ：大きな声、小さな声、甲高い声、低い声、太い声、細い声、……。
- ・「口調」のみ：ゆっくりした口調、よどみない口調、ぞんざいな口調、……。
- ・「声」と「口調」の両方：以下の(12)～(25)の用例参照。

おそらく、音声の物理的特徴として直接的に捉えやすい比較的単純な事象から、さまざまなレベルの社会的・心理的な要因が複雑に交錯している事象に至るまで、いろいろな段階の事象がいろいろに描写されていると思われる。それを選び分ける方法を見出すことが、課題となる。

【するどい声／口調】

(12) 「いや、この人たちは、亡くなった矢野みどりさんの関係者です。それより、その手紙

は、あなたが、書いたものですね？」／大西が、鋭い声で、いった。（西村京太郎『死への旅「奥羽本線」』）

(13) 「勝昌彦さんでしょう」／佐々木は、鋭い口調で言った。（笹沢左保『餌』）

[はげしい声／口調]

(14) そのかわりに、ふいに白川から目をそらすようにして、白川がぎくりとするほど激しい声でささやいた。／「松田の奥さんがあんなところで立ち話にひきとめさえしなかったら、けんちゃんは連れていかれやしなかったのよ。白ブタ！ けんちゃんに何かあったらわたしあの女をこの手で殺してやるわ」（栗本薫『羽根の折れた天使』）

(15) 「彼女とは、どんな関係なんだ？」／高見が、激しい口調で、いった。（西村京太郎『死への旅「奥羽本線」』）

[おだやかな声／口調]

(16) ややあってマネジャーが唇をひとめして、穏やかな声で相手をなだめた。／「そんなことはない、そんなことはないです。現に……」（鮎川哲也『塔の女』）

(17) 「もう一つ失礼なことをお訊きしますが」／と、わたしはできるだけ穏やかな口調でいった。（鮎川哲也『割れた電球』）

[きびしい声／口調]

(18) 「あんた、どうしてこんなインチキしたの」／一郎はきびしい声で言った。（陳舜臣『キッキング・カズン』）

(19) 「青井君、そろそろお昼の用意をしてちょうだい」／と彼女はきびしい口調でいった。（三好徹『天使の棄児』）

[やさしい声／口調]

(20) 「どう、気がついた？ なぜ、きみはこうやっているのかわかるかね」／宗岡が、意外と優しい声で質問した。（戸川昌子『裂けた鱗』）

(21) 「——いえ、入院といっても、心配なさるほどのことではないのです」／電話口で絶句している久美子に、峰岸はゆるやかな優しい口調でいった。（『暗い玄海灘に』夏樹静子）

[あかるい声／口調]

(22) 節子と柴田が音楽会から帰ってきた。／「楽しかったわ」／と節子がいった。音楽会が楽しかったのか、柴田と一緒に聞いたのが楽しかったのか、どちらともとれる明るい声だった。（石沢英太郎『視線』）

(23) 「お待たせしました」／妙子はできるだけ明るい口調で言って、須磨子の方へ戻って行った。（仁木悦子『空色の魔女』）

[しずんだ声／口調]

(24) 突き落されたのか、と頭のなかで呟きながら、滝上は、／「旦那は泳ぎはできたのかい」／「できなかつたはずですよ」／「金槌だったのですか」／滝上は沈んだ声で、溜息といっ

しょに吐き出すように呟いた。(小林久三『海軍某重大事件』)

- (25) 上野駅に着いたとき、教えられたダイヤルを回して真田に電話をしてみた。ラーメン屋の名を思い出しているかもしれぬ、というあわい期待があったからだ。／「まだ思い出せません、残念ですが」／沈んだ口調が聞えてきた。(鮎川哲也『水難の相あり』)

6. 「声」と「口調」が共起する場合

採集した用例の中には、「声」による描写と「口調」による描写が、同一文中に共起するものがある。例えば次の(26)～(29)では、「声」と「口調」とで描写される事象にはっきりとした違いがあり、両者が話しぶりを描写するうえで一定の役割分担をしているように見える。

「はげしい」「断定的な」「怒気がわかるような」といった心理的要素の強い事象は「口調」として、「声を落とす」「ダミ声」「張りのない」「かすかな」といった物理的・生理的要素の強い事象は「声」として描かれているようである。「声」と「口調」が分離して捉えられることを示す興味深い用例であり、事象を分類する際の手がかりとなる。

- (26) 「何、大使の誘拐か？」／大須賀は、烈しい口調で、しかし声は落として聞いた。(佐野洋『大使”夫人”誘拐事件』)

- (27) 松宮警部補は、烈しい口調で、部下を激励した。二十貫ちかい巨体を、ゆすりたてるようにして、特長のあるダミ声が、刑事たちの耳をたたいた。(土屋隆夫『淫らな証人』)

- (28) 「腰椎麻酔は、患者の体質によっては、時にショック症状を伴うことがあるのです。亡くなるようなことは、まずめったにないのですが。――しかし、まあ、白井さんの場合は、そう考えるしかありません」／声に張りはないが、口調は断定的であった。(夏樹静子『暗い玄海灘に』)

- (29) 二人部屋の病室だが、隣のベッドの患者が退院することになり、寛子が、／「さびしいでしょうから、今晚からあたしがついていましょうか？」／と言うと、目をとじ、口をへの字にして、枕のうえではげしく首を横に振った。声はかすかだが、／「よけいなことをするな！」／と、怒気がわかるような口調で答えたものである。(陳舜臣『長い話』)

参考文献

- 1 ウィリアム・S・ハウエル、久米昭元『感性のコミュニケーション』(1992.6, 大修館書店)
- 2 上村幸雄「言語音声は何を伝えるか」(『言語生活』151, 1964.4)
- 3 林大「言語生活」(『言語生活』435, 1988.2)
- 4 相澤正夫「音声言語のスタイル」(『日本語学』16-13, 1997.12)

付記

本発表は、「言語表現と話者の心的態度に関する対照言語学的研究」(国立国語研究所特別研究, 1994年度～1997年度), 「日本人の話しことばに関する総合的研究」(国立国語研究所特別研究, 1997年度～)における調査研究をもとにしている。大量の用例採集とパソコン入力にあたっては、諸川玲子、伊藤啓子の両氏に大いに助けられた。記して感謝申し上げる。